「都留の植物散歩」には有名な三ツ峠を始め，御正体山，桂川沿いから街の中などで見かける種類を，次に「季節の植物」では春・夏・秋～冬の花や果実，群落の様子，帰化植物，有毒植物，紅葉などについて次々と説明し，県や市指定の「天然記念物」，「自然観察のしかた」その他に及んでいる．（伊藤　洋）

□Yu Cheng-hong and Chen Ze-lian : **Leaf Architecture of the Woody Dicotyledons from Tropical and Subtropical China.** 414pp. 1991. Pergamon Press London. ¥20,700.

中国南部産の木本双子葉植物の葉脈パタンの図鑑で，96科656種類が記録されている．本文は科，属，種の葉脈パタンの記述に終始し，属単位で検索表がつけられているが，systematicsに関する議論はない．283－403頁は図版，405－414頁は学名の索引である．葉のサンプルは主として標本室所蔵のおしば標本から得ており，栽培品も含まれている．葉脈パタンの研究は，わが国では古植物研究者によって進められており，棚井敏雅氏や植村和彦氏によって資料の蓄積が行われ，一部カタログが出版されているが，現世植物の分類学や形態学の研究者は身を入れていない．物質レベルの研究を「本質的」として重視する反動として，記述的，横断的研究を軽んじる雰囲気の中では，こういう研究はやり難いだろう．しかし葉脈も形質の一つだから，いつ迄も知らん顔をしてはいられまい．葉脈パタンの知識は，古植物学，分類・系統学，形態学に必要なだけではなく，民俗学，考古学，生薬学，犯罪捜査，商品開発などの分野でも有用性が高い．こうして中国植物の葉脈パタンの集成が進めば，わが国の研究の遅れが目立つことになるだろう．葉脈標本の保存には，プラスチックシートでラミネートする，いわゆるパウチ方式がとられている．この方法は製作が簡便で標本の扱いに神経を使わないで済むが，永続性や顕微鏡像の精細さには問題があるようだ．わが国では硬化プラスチックに封入してガラス板で挟む方式がとられており，精細な検鏡が可能で保存性もよいが，重量が大きいことやガラスという点で取り扱いに難点がありそうだ．とにかくわれわれにとって，よい刺激になる業績である．（金井弘夫）

□緑区・自然を守る会：**Yato 横浜・新治の自然誌** 80pp. 1992. 文一出版社. ¥2,000.

横浜市の一角の谷戸（山ふところの地形）に，わずかに残された雑木林の自然が失われないようにと活動を続けてきた人たちが，自ら得た資料，写真などを元に制作した．見開き2頁を一週間に見立て，レンゲソウの週とかクツワムシの週とかの季題をつけ四季の動植物や景観が美しくかつ詩的なカラー写真で記録され，おさえた調子の観察記がそえられている．巻末に花ごよみ，鳥ごよみ，短い解説文がある．たいへんよい本なので，おすすめしたい反面，この本によって新治の谷戸の美しさが知られ，訪れる人がふえることを心配しなければならない現状は憂鬱である．知られれば盗掘者にねらわれ，訪問者の増加は土地の踏み固めと，群集対策を目的とした整備事業をもたらすだろう．いずれも著者達の意図に反する結末である．自然保護運動のむづかしさを，あらためて感ずる．（金井弘夫）

□岩槻邦男（編）：**日本の野生植物・シダ**　本文311pp. 図版196pp. 1992. 平凡社，東京. ¥19,500（税込）.

琉球・小笠原を含む日本全国に自生するシダ植物すべてを取扱った，と緒言に書かれているとおり630種にのぼるシダが解説されている．B5判のページ一ぱいに，大小4～6個合計970個の美事な原色写真が並び，取っ付きにくいシダもよくわかる．これは全国35氏（と協力者46名）のシダおよび写真の専門家の撮影によるという．シダの葉は似た種類間でも微妙な色の違いがあり，同一株から出た葉でさえ形や切れ込みに差があるので，葉一枚や単色線画ではわかりにくい場合もある．本書では数枚の葉を着けた株から数十枚の葉の群落までを，現地で撮っているので，変異の様子も立ち方や並び方など生態の癖も知ることができる．細かい特徴たとえば葉縁の切れ込み方，葉脈の分かれ方，胞子嚢群の形・着き方，包膜，葉柄の鱗片などは拡大写真を用意している．本文の方の解説は種ごとに：和名，学名とよく用いられる異名，

特徴をよく捕えた説明，染色体数，成分，分布，興味ある話題などが書かれている．種ごとの説明の前にそれらの種が含まれる属の特徴と種への検索表があり，同様に幾つかの属の前に所属の科の特徴と検索表という組み立てになっている．科の配列は田川・岩槻（1972）の分類系によっていて，いわゆるウラボシ科が細分されている．上記のような各論が本書のほとんどを占めていて，最初に38ページの総論がある．シダ植物は何かから始まり，生活環・無融合生殖，次いで胞子体・配偶体の説明で読者に必要な智識を述べ，次いで多様性・種分化・系統・分類・分布など，最後に植物と人間，絶滅に瀕する種類などが述べられている．この途中に日本産の科の検索表がある．内容豊富で簡明，初心者にもわかりやすく，上級者にも大いに役立つ書物である． （伊藤 洋）

□Camus J. M. (ed.) : **The History of British Pteridology 1891－1991.** 127pp. 1991. British Pteridology Society, Special Bulletin. no. 4. £5.0.

全英シダ学協会は100年の歴史を経たが，その機会に100年を回顧する記念論文集を編んだ．とはいっても，厳密に100年史を意図したものではなく，自由に書かれたエッセイを混載した部分もある．プロローグとエピローグは詩の形でまとめられ，全体がシダ植物と人々という部分と協会という部分に2大別されている．最初の部分には10篇の論文が載せられ，化石と実験解析という研究分野別のもの，シダのリストと図説の歴史，景観とシダや保全に関するもの，栽培の歴史とその典型例，それに純粋にシダ学に没頭した巨人Holttumと，植物学の専門教育を受け，それでいてロック歌手となり，そしてオシダ属の研究に大きな成果を上げているFraser-Jenkinsの自分史と，多様な文章が連なる．Holttum先生の遺稿はありし日の先生を偲ばせる良い文章である．また，後半の3篇は全英シダ学協会の100年の歩み，覚え書の紹介，歴代会長や幹事長の紹介，それに26枚の歴史を物語る写真とで構成されており，これは綴られた資料篇とでもいうべきものである．博物学の時代から現代まで，アマチュアも専門家も一緒にシダ学を学び発展させている紳士の国の歩みが伺い知れる楽しい冊子である．英語の文献が読めるアマチュアと，該博な知識に裏づけられながら常に山野を跋渉することに楽しみを享受しようとする専門家が，限られた数の自生のシダからどのように歓びを見出してきたのか，植物と人とのちょっと良い関係を物語る冊子として，いろんな分野の人にお薦めしたい． （岩槻邦男）

□Holttum R. E. : **Flora Malesiana series II vol. 2. part 1. Tectaria Group** 132pp. 1991. Foundation Flora Malesiana. Rijksherbarium, Leiden.

Richard Eric Holttum氏は，1895年イギリスに生まれ，1922～1954年の間シンガポール植物園を中心に，後Kewに戻られて主としてシダ植物やラン科の分類学的研究を続けてこられたが，1990年9月に95才で亡くなられた．このFlora Malesianaのシリーズの1冊は氏の最後のまとまった論文で，これまでBlumea等の雑誌に発表されてきた知見のうち，マレーシア地域のナナバケシダ*Tectaria*類についてまとめたものであり，ナナバケシダ属やカツモウイノデ属*Ctenitis*を含む11属が取り扱われている．このうち，最も大きな属であるナナバケシダ属には105種が認められているが，23種が新種であり，これらは新変種(9)，新組合せ(2)と共にBlumca **35** : 347－557 (1991) に発表されている．

なお，これまでに出版されているFlora Malesiana series II，シダ植物にはヘゴ科，ウラジロ科，ミズニラ科，ホングウシダ科，ツルキジノオ科，フサシダ科，ヒメシダ科がある． （三木 栄二）

□Desikachary T. V., Krishnamurthy V. and Balakrishnan M. S. : **Rhodophyta** 277pp.＋pls.1－12＋279pp.＋figs.1－51＋pls.1－41. 1990. Madras Science Foundation, Madras. ¥10,000.

インド紅藻植物誌ともいうべき本で，第1部総論（276頁），第2部分類編（279頁）から成る．総論は，細胞構造，体構造と生殖，系統，分類体系の4章より成り，最も多く頁を割いた章は体構造と生殖に関するもので，170頁が費される．全